九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

初唐四傑の文学思想

古川，末喜
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9777

出版情報：中国文学論集. 8, pp.1-27, 1979-09-30. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

初唐四傑の文学思想

古川末喜

一　はしがき

この論稿は小生の初唐文學思想史に關する考察の一環をなすものである。上古の時代から漢代にかけて、文學の價値は倫理、政治への功用性において意義づけられていた。が、魏晉期における文學理論の發展の過程で、漢代的文學は倫理、政治的功用性の羈絆から脱し純化されていく。そして、やがて六朝も末期になると文學の自立、ひいては文學至上主義的立場の出現にまで至る。ところが七世紀に至つて唐王朝が創建されるや、再び漢代の儒家的文學思想が復活してきた。(1) それは何も中唐の古文運動をまつ必要はなかった。すでに初唐の時期から儒家的文學思想が六朝の藝術的文學論を壓倒していたのである。南朝齊梁の美文學を攻撃した初唐の四傑も、やはり儒教思想の立場に立ってそれをなしたのであった。

四傑とは、七世紀後葉の唐王朝高宗期に活躍した王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王の四人の文人である。彼らは既に在世當時から「王楊盧駱」という名稱で併稱されていた。彼らが現在に至るまで「王楊盧駱」または「四傑」とし

て併稱されてきたのは、初唐文壇における彼らの文學が共通するという認識があつたからに他ならない。事實それは、宮廷サロン文學中心の時代に、非宮廷詩人として、艶冶な南朝の齊梁的な詩を批判し、長篇七言歌行體を創始し、五言近體抒情詩の先驅となるなど、いずれも盛唐文學の開花を準備したという點で共通した業績を成し遂げたものであった。

從ってその共通した文學業績の面にひきずられて、從來四傑の文學思想研究は、彼ら四人に共通性をさぐる方向で論述される傾向が強かった。例えば羅根澤の『中國文學批評史』においても、郭紹虞の『中國古典文學理論批評史』においても、いずれもただ南朝齊梁以來の修辭主義的文藝に對する鬪爭、反對という共通面でしか論じていず、その文學思想の異質な點が見落とされてきたと言える。いま四傑の文集の中に、それぞれの文學史觀を述べた發言があることに着目して、できうる限りその異質な點に注意を向けながら、唐代文學思想史上における四傑の文學思想の位置、及びその性格をさぐってゆこうとするのがこの小論のねらいである。

二　楊　炯

まず四傑の中で最も後年まで生存した楊炯から檢討しよう。楊炯の生年は高宗卽位の年の永徽元年（六五〇）であり、王勃と同年である。「後周明威將軍梁公神道碑」（『楊盈川集』卷六）によれば、則天武后の長壽二年（六九三）まで生存していたことは確かであるが、恐らくはその後一、二年のうちに卒したと思われる。

楊炯の本籍は、『舊唐書』は華陰（陝西）の人とする。彼自身「從弟去溢墓誌銘」（同右卷九）で從弟を「宏農の楊

去溢」とよんでいる。「この華陰縣を本貫とせる楊氏は唐代に至るまで弘農を以てその郡望としていた」（竹田龍兒氏「門閥としての弘農楊氏についての一考察」）ように、楊炯は六朝以來の門閥貴族、弘農の楊氏の出身であった。從來一部に、四傑について彼らは名門貴族の出身ではないと言われていたが決してそうではない。後でも述べるように盧照鄰、王勃も范陽の盧氏、太原の王氏に連なる名門の出なのである。現に楊炯の祖父の楊虔威は右衞將軍（從三品）にまでなっており、楊炯の姉妹の一人は安定の名門梁氏と通婚している。しかし楊炯自身は官は低かった。とは言っても四傑の中では、浙江省の盈川（上縣）の縣令（從六品上）となり、[2] 最も出世したと言える。

聞一多の「唐詩雜論」が指摘するように、楊炯は四傑の中では同世代の王勃と關係が深く、その文集にも序を書いている。楊炯の文學史觀は、その冒頭の次の叙述からうかがうことができる。

大なるかな、文の時義なるや。天文有り。時を察して以て其の變を觀る。人文有り。言を立て以て其の範を重んず。年を歴ること滋く久しくして、遞いに文・質と爲る。運に應じて以て其の明を發き、人に因りて以て其の粹に通ず。仲尼既に沒して、游・夏、洙泗の風を光かせ、屈平自から沈んで、唐・宋、泊羅の跡を宏む。文儒は焉に於いて術を異にし、詞賦は所以に源を殊にす。秦氏の書を燔くに逮び、斯文天喪せり。漢皇運を改むるも、此の道は還らず。賈・馬の蔚興するも已に雅頌に虧け、曹・王の傑起するも、更に風騷を失なう。大猷に僶俛むるも、未だ前載を忝くせず。潘・陸の奮發し、孫・許の相い因るに洎び、之を繼ぐに顔・謝を以てし、之を申ばすに江・鮑を以てす。梁・魏の群材、周・隋の衆制、或いは苟くも虫篆を求め、未だ力を丘墳に盡くさず。或いは獨り波瀾に徇い、源を禮樂に尋ねず。（王勃集序）

ここには文學・學問を含む所謂「文」から說き起こして、先秦の子游・子夏や屈原・唐勒・宋玉をはじめ、漢の賈誼・司馬相如、魏の曹植・王粲、西晉の潘岳・陸機、東晉の孫綽・許詢、宋の顏延之・謝靈運、齊の江淹・鮑照の名をあげ、さらに梁と北魏、北周と隋までの文學が批評されている。楊炯はここで子游・子夏と唐勒・宋玉までは、孔子や屈原の創作精神を輝かせ宏めたものだとして評價しているが、それ以降の文學は、孔子や屈原の創作精神を失ってしまったとして否定的な評價を與えている。漢の司馬相如も魏の曹植も晉の潘岳・陸機も宋・齊・梁・隋までおしなべて否定しているのである。ということは、漢魏晉より北朝・唐までの主要な文人がほぼ全面的に否定されていることを意味している。非常に偏向した强硬な文學史觀だと言わねばならない。

このような文學史觀は、同じ四傑の中では漢魏晉を高く評價する駱賓王、さらには、南朝の齊梁文學までも部分的には評價する盧照鄰とは極めて對象的なとらえ方である。一方、この楊炯の文學史觀は王勃とかなり似ているが、しかし王勃は「屈原・宋玉が澆源を前に導き、枚乘・司馬相如が淫風を後に張った」と言うように既に先秦時代の屈原・宋玉から否定しており、楊炯に比べて更に徹底しているといえる。他に初唐では、ほぼ三十年後の盧藏用の文學史觀も楊炯に類似するものである。盧藏用は、彼の友人であった陳子昂の文集序に次のように述べている。

昔、孔宣父、天縱の才を以て、衞より魯に返り、乃ち詩書を刪し、易道を述べ、而して春秋を作る。數千百年、文章は粲然として、觀るべき者なり。孔子沒して二百歲にして騷人作る。是に於いて婉麗浮侈の法行なはる。漢興りて二百年、賈誼・馬遷、之れの傑爲り、禮樂を憲章して、老成人の風有り。長卿・子雲の儔は、瑰

詭にして萬變し、亦た奇特の士なり。惜しむらくは其の王公大人の言、流辭に溺れて顧りみられざるを。其の後、班・張・崔・蔡、曹・劉・潘・陸、波に隨いて作る。大雅足らずと雖も、然れども其の遺風餘烈は、尚お典型有り。宋・齊已來は、蓋し顛頽逶迤し、陵頽流靡す。徐・庾に至りて、天の將に斯文を喪ぼさんとするなり。後進の士、上官儀の若き者繼踵して生まる。是に於いて風雅の道、地を掃いて盡きたり。

（陳伯玉文集序）

盧藏用は、ここで先秦時代の辭賦作家たちをはじめ前漢の賈誼・司馬遷・司馬相如・楊雄、後漢の班固・張衡・崔駰・蔡邕、魏の曹植・劉楨、西晉の潘岳・陸機たちを部分的には評價しているが、技巧に溺れ大雅の風が足りないとして、その先秦の辭賦、漢魏晉の文學を批判している。このように楊炯、王勃、盧照鄰らの文學史觀には、微妙な違いはあるものの、早くも先秦ないし漢代文學以降を批判、否定する點では共通するものであると言える。

四傑の時代までに文學史觀を述べたものには、南朝では沈約の『宋書』謝靈運傳論、鍾嶸の『詩品』序、劉勰の『文心雕龍』明詩篇、時序篇、蕭子顯の『南齊書』文學傳論等があり、また北朝では魏收の『魏書』文苑傳、さらに唐初では太宗期に前代の歷史書が集中的に作られ、房元齡の『晉書』文苑傳序、姚思廉の『梁書』文學傳序、『陳書』文學傳序、李百藥の『北齊書』文苑傳序、令狐德棻の『周書』王褒庾信傳論、李延壽の『南史』文學傳序、『北史』文苑傳序、魏徵の『隋書』文學傳序等がある。しかしそれらと比較しても、楊炯、王勃、盧藏用らのように先秦ないし漢文學以降を否定する文學史觀はまずない。そういう意味では彼らの文學史觀は、南北朝から初唐を通じて外に類例を見い出せない、極めて稀な文學史觀だったと言えよう。

しかし、ここに楊炯、王勃、盧藏用らの文學史觀に先行するものがある。それは後漢の班固の『漢書』藝文志詩賦略である。そこで「大儒孫卿及び楚臣屈原は、讒に離り國を憂え、皆な賦を作りて以て諷す。咸な惻隱の古詩の義有り。其の後は宋玉・唐勒、漢興りては枚乘・司馬相如、下りては楊子雲に及ぶまで、競いて侈麗閎衍の詞を爲り、其の風諭の義を沒す」というように、班固は古詩の義ありとして屈原までを評價するが、宋玉・唐勒以降は淫麗で、風諭の義を失ったとして否定している。とすれば楊炯、王勃、盧藏用らの先秦ないし漢文學以降に對する批判、否定の文學史觀は、南朝から唐初太宗期までを隔てて、遠く班固流の漢代儒家的文學史觀の再現と言えるであろう。また四傑から一世紀ほど後になると、これと共通する文學史觀が再び初期古文家の李華、獨孤及、柳冕、そして韓愈等の中に現われて來る。或いは李華、獨孤及、柳冕、韓愈らの唐代古文家の文學史觀の祖型は、初唐四傑のこの楊炯、王勃らにあったと言えるかもしれない。

さて、楊炯が「王勃集序」で過去の文學史を判斷する際の價値基準は「已に雅頌に欠け」とか「更に風騷を失ない」とか、また「苟くも蟲篆を求め、未だ力を丘墳に盡くさず」とか「源を禮樂に尋ねず」とか言うように、雅頌であり、風騷であり、丘墳であり、禮樂である。つまり風雅頌の六義の精神のある詩經文學、そして國を憂えて賦を作り諷諭した屈原文學、こうした傳統を欠くからだめなのであり、蟲篆すなわち文章の雕琢を追い求めるだけで、丘墳、禮樂などの儒敎の古典、敎義に基づかぬ文學だから否定されているのである。このように楊炯の文學史觀は儒家の立場に立ったものであった。

同じくこの「王勃集序」には、楊炯が同時代の文壇を批評した部分がある。

嘗て以へらく、龍朔（六六一―三）の初載、文場は體を變じ、爭いて纖微を構え、競いて雕刻を爲す。之に金玉龍鳳を糅ぜ、之に朱紫青黃を亂す。影帶以て其の功を徇へ、假對以て其の美を稱す。骨氣は都て盡き、剛健は聞こえず。其の弊を革め、用て志業を光かさんと思う。薛令公は朝右の文宗にして、末契に託して一變を推す。盧照鄰は人間の才傑にして、淸規を覽みて九攻を輟む。知音は之に與し、知己は之に從う。

ここで述べている文壇批評は、「龍朔の初載」からこの序文が書かれた時代、則ち六六〇年代から六八〇年代にかけての時代を對象とする。その當時の文壇は、未だ南朝の餘波を受け艶冶な修辭に凝った美文が主流であった。そのような美文流行の文壇を、楊炯は「爭って纖微な技巧をかまえ、競って雕琢をなすもの」、「骨氣はすべて盡き、剛健は聞こえず」として手嚴しく批判したのである。それは、序文の後半の次の言い方においても同樣である。

妙異の徒は、別に縱誕を爲し、專ら怪說を求め、爭いて大言を發し、乾坤日月に其の文を張り、山河鬼神に其の思いを走らす。長句は以て其の滯りを增し、客氣は以て其の靈を廣む。

これらの文壇批評から、楊炯が煩瑣な聲律や雕琢に凝った美文を否定する文學思想の持ち主であったことがわかる。そして、當時の美文主流の文壇への批判は、前にみたように漢以降を全否定した儒家的文學思想の立場にたってなしたものであった。

ここで注意すべきことは、楊炯が單に南朝風な艶冶な美文を批判したというだけでなく、當時それを改良しようという動きが存在したことを述べていることである。つまり薛令公（薛元超）、盧照鄰、末契（楊炯）、そして王勃

本人、彼らを中心に詩文改良運動とでも言うべきものが存在したのである。しかし、それが決して駢文や律詩を否定し新しい文體を創造する革命運動でなかったことは、彼ら自身の文體を見れば瞭然である。それではその改良運動は、何を否定し何を目指したのかと言えば、あくまで駢文、律詩の枠内で競つて細かな聲律や雕琢を事としていた詩文、また乾坤日月にその文を張り山河鬼神にその思いを走らせていた詩文、そのような詩文を改良して、骨氣ある、剛建な文體を目指したものだったのである。

三　盧照鄰

四傑の中で最も早く生まれたのが、次に取りあげる盧照鄰である。生卒年は不詳で數説あるが、いま高木正一氏の説(3)に從えば、貞觀年間の半ばごろ六三五年に生まれ、則天武后が唐王朝の實權を掌握した六八四年に投身自殺した。

盧照鄰の出自は范陽の盧氏で、さきにみた盧藏用と同じい。范陽の盧氏といえば六朝以來の門閥貴族である。盧照鄰は「五悲」と題する文章のなかで「子は有唐の文士、燕地の高門に非ざるか」(悲窮道)と自問しているように、盧照鄰もまた名門貴族の出身であった。彼は、若くして四川の新都の尉(從九品上)を辭してより正式な官位にはつかなかったが、それは風疾を患ったためである。范陽の盧氏出身の盧照鄰に榮達の條件がなかったわけではない。現に彼の兄の盧乘光は隴州刺史(從三品)にまでなっている。

彼の文集の中にもやはり文學史觀を述べたものがある。來濟(六一〇—六二)の文集への序文がそれであって、

次のようにいう、

獲麟絶筆より、一千三四百年。游・夏の門には、時に荀卿・孟子あり。屈・宋の後は、直ちに賈誼・相如に至る。兩班の叙事は、邱明の風骨を得、二陸の裁詩は、公幹の奇偉を含む。鄴中の新體は、共に晉韻の天成を許し、江左の諸人は、咸な瓌姿の艷發を好む。精博、爽麗なること、顔延之は病を江、鮑の間に急にす。疎散、風流なること、謝宣城は歩を江・劉の上に緩くす。北方の重濁、獨り盧黄門のみ往往に高飛し、南國の輕清、惟だ庾中丞のみ時時に墜ちず。（南陽公集序）

また、この上文において「袁・曹已に平らかなりて、除・陳・應・劉は柔翰を當代に弄ぶ」とも言う。ここで盧照鄰は、先秦の屈原・宋玉より、漢の賈誼・司馬相如、魏の劉楨・除幹・陳琳・應瑒、晉の陸機・陸雲、宋の顔延之・鮑照、齊の謝朓・江淹・劉繪、梁の庾肩吾、北周の盧思道等の文人をあげているが、南朝の文人をも含めておおむね好意的な目でみている。その中でもとくに、

聖門に賦を論ずれば、相如、入室の雄爲り。闕里に詩を裁てば、公幹卽ち升堂の客たり。陸平原は龍のごとく學海を驚かし、天泉に浮かびて以て安流す。鮑參軍は鶴のごとく文場に翥たち、黄金の平埒を代ゆ。

（駙馬都尉喬君集序）

というように、司馬相如、劉楨、陸機、鮑照を高く評價している。盧照鄰の文學史觀は漢、魏晉を評價するだけでなく、部分的ながら、南朝とくに齊、梁の文人たちをも評價しているのが特徴的である。この點、漢魏晉より南朝までを全面的に否定した楊炯、王勃の文學史觀とくらべて極めて對照的である。また「南朝宋の顔延之と謝靈運よ

り以降は、聲律が精かくなり能く本を正すことがない」（和道士閨情詩啓）として齊、梁以降を全面否定した駱賓王の文學史觀とも大きな差がある。つまり盧照鄰の文學史觀は、四傑の中で最も南朝の唯美文學へ傾斜した柔軟な文學史觀であると言えよう。

今まで檢討してきた楊炯、盧照鄰の文學史觀は、それが學問、文學を含む原初的なものとしての「文」から說き來たっていたように、儒學の歷史と密接な關係にあることが想定される。つまり漢魏以降を全否定した楊炯、王勃と漢魏を評價する盧照鄰との文學史觀の違いは、その背景に、漢魏の時代を孔子沒してより儒學の道が復興した時代とするか、それともそのまま後世まで復興しなかったとするかの儒學史觀の違いがある。文學史のうえで既に先秦の屈原から漢魏を全否定した王勃は、儒學史の上でも「微言が絕えてしまってから斯文が振わない」（上吏部裴侍郎啓）として孔子以後の儒學史を評價していない。楊炯も同じく「秦氏が書を燔くに逮んで斯文は天が喪ぼし、漢皇が運を改めたが此の道は還らず」（王勃集序）として、漢になっても斯文は復興しなかったとしている。ところが盧照鄰はこれとは逆に、

昔は、龍東魯に蹲り、禮樂を陳べて蒼生を救い、虎西秦に據り、詩書を焚きて以て黔首を愚る。――是を以て楚・漢方に鬪いて、蕭・曹・絳・灌は長劍を此の時に負い、袁・曹已に平らぎて、徐・陳・應・劉は柔翰を當代に弄ぶ。――文質再びにして、復た殷周の損益は徵するに足り、驪翰三たびにして、始めて虞夏の興亡は及ぶべきなり。美たるかな、煥たるかな、斯文の功大なり。（南陽公集序）

というように、魯で詩、書、禮、樂がおこり、秦の焚書坑儒でそれが亡んだが、漢魏はそれが復活した時代である

としている。そして漢魏の時代を殷、周の損益を徴するに足り、虞、夏の興亡に及ぶことができる時代とまで言いきって高く評價しているのである。(4) このように彼らの文學史觀は、斯文の道の歴史をどうみるかという儒學史認識の問題と有機的に結びついていたと言えよう。

さて私は、盧照鄰の南朝美文肯定をやや強調しすぎたきらいがあるが、もちろんそれは全面的な肯定ではない。それでは彼は、南朝美文の何を否定するのか。同じく「南陽公集序」で、

八病爰に起こりて、沈隱侯は永く拘囚と作り、四聲未だ分かならずして、梁の武帝は長く聾俗と爲る。後生は曉る莫くして、更に文律の煩苛なるを恨む。昔を知る者は稀にして、常に詞林の交も喪はるを恐る。雅頌作らざれば、則ち後に死する者は焉ぞ得て聞かんや。

と言うように、四聲八病説に代表されるような煩瑣な聲律に凝った修辭的文藝に反對したのである。ただここで注意しておく必要があるのは、齊梁唯美文藝の缺點とされている華美な辭句の雕琢、現實から遊離した空疎な內容等に反對しているのではないことである。齊の永明時代の新體詩の中から沈約の四聲、八病説等、人工的に音律の美をつくりだす自覺が生まれてきたことは、中國韻文史上畫期的な事件であった。しかしその反面、齊梁以降の詩文がいよいよ修辭に凝り、聲律上の細かな約束事に拘泥し退廢して行ったことも事實である。盧照鄰がここで問題にしているのは、あくまでその聲律如何の問題であり、その煩瑣な聲律を批判しているのである。このように南朝文學をその聲律面に限定して批判するのは楊炯、駱賓王、王勃と異なる。またこの點で詩の中に思想性、政治性、現實性、風刺性等を盛り込めと主張する盛唐以降の古詩運動者たちとも異なる。從ってここで「雅頌作らざれば、則

ち後に死する者は焉ぞ得て聞かんや」という時の雅頌とは、正しい聲律を備えた詩という意味であり、決して盛、中唐の李白、白居易ら古詩運動者たちの言うような詩經の風諭の精神に基づく雅頌という意味ではなかったのである。これは、南朝の齊梁文學をも部分的に評價した彼の文學史觀とも符合するものであった。

四　駱賓王

駱賓王の生卒年は不詳であるが、盧照鄰とほぼ同世代、楊炯、王勃よりは十年ほど年長である。彼の本貫は浙江省の義烏縣、つまり四傑の中で彼だけは江南出身ということになる。父が青州博昌縣の縣令（從六品上）だったということ以外には、彼の出自についてはわからない。婺州義烏の駱氏といっても全然名門ではない。せいぜい江南地方の一土豪にすぎなかったに違いない。彼自身、自からの出自を「某は江東の布衣なり」（「自叙表」）、「某は甕牖の輕生、席門は賤品」（郭賜府に上る啓）などと述べている。つまり他の三人が六朝以來の門閥貴族出身だったのに對して、駱賓王だけが地方の中小地主出身だったのである。

羅根澤は、その著『中國文學批評史』の四傑を論じた「四傑的反對淫巧文」の節で、「四傑の中で駱賓王だけには文を論じた言がない」と言っており、また郭紹虞著『中國文學批評史』・『中國古典文學理論批評史』も駱賓王には言及していない。しかし四傑の中で文學思想を吐露した資料が最も豐富に殘っているのは、實はこの駱賓王である。主に詩についてではあるが、彼にもまた文學史觀をのべた資料がある。

竊かに惟うに、詩の興作（おこ）るは、遂古に基（もとい）を兆（はじ）む。唐歌虞詠、始めて典謨に載り、商頌周雅、方（はじ）めて金石に陳。

ぶ。其の後、志を言い情に緣るは、二京に斯れ盛んなり。毫を含み思いを瀝ぐは、魏晉に彌よ繁し。布きて縑簡に在り、差商略すべし。李都尉の鴛鴦の辭は、纏綿として巧妙なり。班婕妤の霜雪の句は、清迥を發越せり。平子の桂林は、理は文外に在り。伯喈の翠鳥は、意は行間に盡く。河朔の辭人は、王・劉を稱首と爲す。洛陽の才子は、潘・左を先覺と爲す。乃ち子建の群彥を牢籠し、士衡の當時に籍甚するが若きは、並びに文苑の羽儀、詩人の龜鏡なり。爰に江左に逮んで、諷謠輟まず。神骨仙才有るに非ず、專ら玄風道意を事とす。顏・謝特に挺で、戕伐して典麗たり。玆れより以降は、聲律稍く精かく、其の間に沿改するも、能く本を正す莫し。（和道士闈情詩啓）

駱賓王がここで批評の對象に取りあげているのは、『書經』の唐歌・虞詠、『詩經』の商頌・周雅、前漢の李陵・班婕妤、後漢の張衡・蔡邕、魏の曹植・王粲・劉楨、晉の潘岳・陸機・左思、宋の顏延之・謝靈運等である。唐虞文學に始まり、『詩經』を經て、漢、魏、晉までに至る文人を肯定的に評價している。そしてその中でもとくに曹植と陸機への評價が高い。彼らに對して「文苑の羽儀、詩人の龜鏡」だと最高級の贊辭を與えているのである。しかし江左の東晉以降は、顏延之と謝靈運を除いて否定的に述べており、とくに齊梁以降は聲律が細かくなってよく本を正すことがない、として否定している。つまり原則として西晉と東晉とで時代を前後に分け、上古から西晉までを肯定し、東晉以降を否定するという文學史觀である。これは東晉以降の南朝文學も、いいものはいいとして評價する盧照鄰とも異なり、屈原・宋玉、または漢魏以降を全面否定する楊炯・王勃とも異なるその中間的な第三の立場である。

この駱賓王の文學史觀は、同じ初唐では、陳子昂（六六一～七〇二）の「修竹篇序」に、

文章の道弊れて五百年なり。漢魏の風骨は晉宋傳うる莫し。然り而して文獻には徵すべき者有り。僕嘗て暇時に齊梁間の詩を觀るに、彩麗競いて繁く、興寄都て絶す。每に以て永歎するなり。古人を思えば常に、逶迤頹靡し風雅の作らざるを恐れ、以て耿耿たり。……圖らざりき、正始の音復た玆に覩るとは。建安の作者をして相視て笑わしむべきなり。解君云う、張茂先・何敬祖、東方生は其れと比肩すと。僕亦以て知言と爲すなり。

として、漢魏の風骨、西晉の張華・何劭を評價し、南朝の齊梁以降を否定しているが、この文にそれと似た文學史觀を見い出すことができる。このような齊梁文學否定の文學史觀は、盛唐、中唐の古文家以降、中國の文人の中に往々にしてみることができ、四傑の中では一番オーソドックスな、常識的な文學史觀であると言える。

駱賓王が齊梁以降を否定したのは、前にも述べたように聲律が煩瑣になってよく本を正すことがないという理由からであったが、その齊梁以降の否定には、齊の永明體の新聲の出現を契機としていることが予想される。とすればこの點では、否定の程度は異なるものの、四聲八病說等の煩苛な聲律の約束事を批判した盧照鄰に共通すると言える。

駱賓王の文學思想が、儒家的なものであることを示す發言がある。「夏日德州に遊び高四に贈る序」である。

夫れ心に在るを志と爲し、言に發するを詩と爲す。書は言を盡くすを得ざる有り、言は意を盡くすを得ざる有り。

これが、前半がそのまま『毛詩』大序を、後半が『易』繫辭上の「書不盡言、言不盡意」をそのまま踏まえた漢

儒の詩言志説を表明したものであることは今更説明は不要であろう。また「晦日楚國寺に宴する序」「初春邪嶺に益府の竇參軍を送るの宴序」でも「詩は志を言うなり」と同様の發言をなしている。左にあげる資料は「道士の閨情詩に和す啓」で、駱賓王が道士の詩文を批評した部分である。

> 玆の雅奏を弘め、彼の淫哇を抑え、五際の源を澄まし、四始の弊を救う。固より以て之を邦國に用い、此れを人倫に厚くすべし。

ここで駱賓王は、道士の詩文を五際の源を澄まし『詩經』の四始の弊を救うものであると述べ、更に「毛詩大序」を踏まえて、國政に用い風俗を厚くすることができると述べているが、これからも彼が、文學を國政、風俗教化への功用性でとらえる儒家的文學思想を有していたことがわかるであろう。

左にあげる「程將軍に與うる書」からは、駱賓王の文學に對する性格把握をうかがうことができる。

> 詞翰を將って己を行うの内篇と爲さしむる勿かれ。文章は是れ立身の岐路なるのみ。又た何ぞ道うに足らんや。

彼はここで、文學は身を立てる本道ではない、言うに足りないものだと言っているが、また同様の發言を「吏部侍郎に帝京篇を上る啓」の中でも「竊かに雕蟲を譽れとするには非ず。――固より立身の殊路にして、己を行なうの外篇なり」と述べている。いずれも身を立てる、己を行なうという實踐的行爲に對して文學の價値を低くみているのである。このような文學に對する認識の仕方は、實は既に古く儒學の經典の中にみえている。例えば『左傳』の「大上に立德有り。其の次に立功有り。其の次に立言有り」(襄公二十四年)や『論語』の「行ないて餘力有らば則ち以て文を學ぶ」(學而)などである。いずれも道德的・政治的實踐に對して、學問、文學的行爲を第二義的

なものとして低くみている。駱賓王の文學のとらえ方は、このように儒教の傳統的な文學認識に卽したものだったのである。この駱賓王のようなとらえ方は、同じ初唐では「文章は薄伎」「刀筆は小能」（上薛令文章啓）と述べた陳子昂にも見い出せる。また初期古文家の蕭穎士にもあることは、平岡武夫氏がすでに指摘するところである。(5) 韓愈にも同樣の發言があり、中國中世まではこのようなたてまえ論的な發言はしばしば見い出すことができる。(6)

さて駱賓王が正統的な儒家的文學思想を有することが以上で明らかになったが、ここで一つ注意しておくべきことがある。それは駱賓王が儒家的文學思想であると言っても、單純に漢代儒家の文學觀そのままではないということである。「道士の閨情詩に和す啓」で「言志、緣情は二京に其れ盛んなり、含毫、瀝思は魏晉に彌く繁し」と言っているが、このような言い方は一方に六朝文學論の緣情說を承けていることを示唆する。「緣情」「含毫」とも陸機の「文賦」を踏まえている。「李八騎曹を餞する序」で「相い思いて贈る有りて、終に想いを華滋に結ぶと雖も、而れども素賞は睽（たが）うこと無し。盍ぞ情を麗藻に申べざらんや」というのも同樣である。これはまた楊炯が「李舍人山亭詩の序」で、「唯だ談笑は以て平生を遣るべし。唯だ文詞は以て心賞を陳ぶべし」と述べていることにも通ずる。このように駱賓王の儒家的文學思想は、楊炯も含めて、主情主義的六朝文學論の影響を受けた部分があると言えよう。

以上檢討してきたように駱賓王の文學思想は、中間的な文學史觀や言志說や教化功用說や儒教の傳統的な文學のとらえ方などを述べて最もオーソドックスな儒家的文論であった。このような文學思想は、既にそのたびごとに指摘してきたように、四傑の他の三人よりはむしろ陳子昂に相似るものであった。駱賓王と陳子昂は、その現實政治

へ積極的にかかわろうとする姿勢や高い政治意識の點でも似通っている。駱賓王は武后にたびたび上疏して、遂に武后誅滅を圖った李敬業の亂（六八四年）に加擔したし、陳子昂も酷吏を恐れず眞正面からしばしば武后政治を批判した。更に彼らは出身階層の點でも同じである。楊炯、盧照鄰、王勃らは六朝以來の門閥貴族の出身であるが、駱賓王、陳子昂は共に地方の中小地主の出身であった。盛、中唐以降の唐代社會、唐代文學を擔ってゆくのは、周知のように楊炯、盧照鄰、王勃らのような南北朝以來の門閥貴族ではなく、駱賓王、陳子昂らのような原則的な儒教理念に支えられた現實參加の強い政治意識を持つ新興中小地主出身の官僚、文人達であった。そういう意味で駱賓王の文學思想は、陳子昂も含めて、最も一般的、オーソドックスでありえたし、盛中唐以降の文學思想を先取りしたものだったのである。そしてその點にこそ、駱賓王の文學思想が他の三人と異なる異質性が存在したと思われるのである。

五　王　勃

四傑の中で最も晩く生まれ、最も早く逝去したのがこの王勃である。彼は楊炯と同じ高宗卽位の年（六五〇）に生まれ、儀鳳元年（六七六）わずか二十七歳の若さで世を去った早熟の才子であった。[7] 王勃の出自は絳州龍門（山西省）であり、所謂太原の王氏の系譜に連なる。彼もまた楊炯、盧照鄰と同じく門閥貴族の出身であった。[8]『中說』を著わした隋末の儒者王通（文中子）は王勃の祖父であり、初唐の詩人王績（五八五―六四四）はその叔祖にあたる。

王勃にもまた、次のように文學史觀を開陳した發言がある。

微言既に絶えてより、斯文振わず。屈・宋、澆源を前に導き、枚・馬、淫風を後に張る。人主を談ずる者は、宮室・苑囿を以て雄となし、名流を叙する者は沈酗・驕奢を以て達と爲す。故に魏文之を用いて中國衰へ、宋武之を貴びて江東亂る。沈・謝爭いて驁すと雖も、適に齊・梁の危を兆すに足り、徐・庾並び馳すも、周・陳の禍を止むる能はず。是に於いて其の道を識る者は、舌を卷きて言はず。其の弊に明らかなる者は、衣を拂いて徑逝す。潛夫・昌言の論は、之を作りて時に逆う有り。周公・孔子の教えは、之を存して代に行なわれず。天下の文壞れざる靡し。　（上吏部裴侍郎啓）

王勃はここで、孔子以後、先秦の屈原・宋玉、漢の司馬相如・枚乘、魏の文帝・曹丕、梁の武帝劉裕、齊・梁の沈約・謝朓、陳の徐陵、北周の庾信等を批評の對象にあげているが、屈原・宋玉から輕薄な文學が始まったとして、それ以降を漢も魏も晉も唐までの南北朝時代も全て否定している。この孔子沒後の文學史を全面否定する文學史觀は、四傑の中では楊炯に一番似ており、それより更に硬派であり徹底したものであった。それが六朝から初唐にかけては稀少な文學史觀であり、唐代古文家の李華、獨狐及、柳冕、韓愈等に通じるものであったことは、既に述べたとおりである。

それでは王勃の右のような文學史觀の、楚辭以降漢魏六朝文學を全面否定する裏には、彼の如何なる文學觀が存在していたのだろうか。同じく「吏部裴侍郎に上る啓」で次のように述べる條がある。

夫れ文章の道は、古より難と稱す。聖人は以て物を開き務めを成し、君子は以て言を立て志を見はす。雅きを遺れ訓えに背くは、孟子は爲さず。百を勸めて一を諷すは、楊雄の恥ずる所なり。苟くも以て大義を甄明し、

末流を矯正し、俗化資するに興衰を以てし、家國其の輕重に由るべきに非ざれば、古人は未だ嘗て心を留めざるなり。

ここで「かりそめにも、大義を明らかにし末流を正し、風俗教化や國家に役だてることができないものには、古人は未だ嘗て心を留めなかった」と述べているように、王勃は屈原、宋玉以降の漢魏六朝文學を、そのような大義も明らかにせず末流も正さず、風俗教化にも國家にも役だたないような文學だったとして否定しているのである。そのことは逆に、文學は大義を明らかにし末道を正し、風俗教化に役だたねばならぬという認識がその裏にあったことを示している。そういう文學ならば古人は心を留めたであろうし、また文學とは本來そういうものでなければならないという考え方である。つまり王勃は「吏部裴侍郎に上る啓」の中で、文學は政治社會に功用せねばならぬという價値基準を絶對的なものにすることによって、あのように偏向した全否定の文學史觀を述べていたのである。この王勃の文學史觀は、楊炯、盧照鄰、駱賓王が雅頌、風騷に缺け、煩瑣な聲律に拘泥し、よく本を正すことがないとして修辭的文藝を否定した文學史觀とは異なるものである。彼らの唯美文藝否定は、文學上の問題としてより文學者の立場からの否定であった。とするならば王勃の否定は、純粹文學以外の國家社會の立場にたった動機からであったと言えよう。

前に指摘したように、隋末の儒者文中子王通は王勃の祖父であったが、この王勃の文學思想は一部王通の影響下にあったことが考えられる。それは王勃自から王通の『續書』の序を作り、そこで、

我が先君の文中子は、實に睿懿を秉り、隋末に生く。後生の方に違うを覩、異端の正を害するを憂え、乃ち喟

然として曰く、宣尼既に沒して、文玆に在らずやと。遂に大義を約し舊章を刪し、續詩三百六十篇を爲る。……漢魏より始め有晉に迄ぶまで、其の典物の敎に宜(かな)う者を擇び、續書百二十篇を爲る。（續書序）

と王通の『續詩』『續書』の事業を顯彰していることからも想定できる。王通はその著『中說』で、

謝靈運は小人なるかな、其の文傲る。君子なれば則ち典なり。沈休文は小人なるかな、其の文冶なり。君子なれば則ち典なり。鮑照・江淹は古の狷者なり。其の文急にして以て怨む。吳筠・孔珪は古の狂者なり。其の文は怪にして以て怒る。謝莊・王融は古の纖人なり。其の文碎たり。徐陵・庾信は古の夸人なり。其の文誕たり。或ひと孝綽兄弟を問う。子曰く、鄙人なり。其の文淫すと。或ひと湘東王兄弟を問う。子曰く、貪人なり。其の文繁たりと。謝朓は淺人なり。其の文捷たり。江摠は詭人なり。其の文虛たり。皆な古の利せざる人なりと。（事君篇）

と、絢爛たる南朝文學の代表的文人達をひとしなみに否定した。更に王通は「文とは苟(かりそめ)に作ることを云わんや、必ずや義を濟すなり」（天地篇）と言い、文學が天下の公義のために功用すべきことを說いた。また王通の弟王績は「歌詠は會意を以て巧と爲す。必ずしも夫の悠悠たる間人と相唱和せざるなり」（馮子華處士に答うる書）と述べ、修辭的文藝の時流の中にあって敢えて平明、會意の詩を作った。このように王勃の生まれた王氏には、儒學の傳統と南朝の唯美主義的な文藝を忌み嫌う家風があったと言える。楚辭以降の中國文學を全否定し、政治社會への功用を第一義とした王勃の文學思想が、このような王氏の家風の中から現われてきたのは決して偶然ではなかったのである。

更に文學は政治、社會に役たたねばならぬという考えと同様の發言をなしたものがある。「平臺秘略論」である。その藝文三に、

論に曰く、易に稱す、天文を觀て以て時變を察すと。傳に稱す、言いて文無ければ之を行いても遠からずと。故に文章は經國の大業、不朽の能事なり。

と言う。このように『論語』『易』『左傳』等の經典や近くは魏の曹丕の『典論』論文の發言を引きながら、文學の政治的社會的功用性を說いている。ところがその直後で、一見それに矛盾するかのような發言をなしている。すなわち、

而るに君子の心を役し神を勞する所は、大なる者遠なる者に於いて宜しく、緣情體物の雕蟲小技に非ざるのみ。是の故に思王は、辭頌（賦）は君子と爲すを恥ず、と抗言し、武皇は、篇章は僅かに往事を稱するのみと裁勅す。其れ然らざらんや。

ここで王勃は「君子たるものは緣情體物の雕蟲の小藝を事とすべきでない」と述べているが、それは彼が國家的な治政の觀點から緣情體物、雕蟲小技の文藝を否定する考え方をもっていたことを示している。言いかえれば、緣情體物の文藝には國政にかかわる功用性はないとする考え方である。だからこそ君子はなすべきでないと述べているのである。とすればそれは、前半で文學の政治的社會的功用性を說いた發言と矛盾しないだろうか。もちろんこの二つの發言は決して矛盾するものではない。すなはち彼は、文學を本來あるべき正しい文學（王勃は「文章」の語を使う）と、緣情體物の雕蟲小技の文藝とに分け、前者は政治、社會に役だつが後者は役だたないとして區別して

いたのである。

それではこの正しい文學と區別された緣情體物の文藝は、王勃にとって如何なる意味があったのだろうか。第一にそれが、雕蟲の文藝には國政にかかわる功用性はないとするものであったことは、今述べたとおりである。しかし同時にそれは、緣情體物の雕蟲小技の文藝は政治に關係なく徹底して言語表現を樂しむあそびであるということも意味していた。つまり彼にとっての雕蟲の文藝とは、國政への功用性はないものの、言語表現の遊びとしてそれ自身で積極的な存在意義をもつものだったのである。今そのことを證する發言がある。「採蓮賦」で次のように言う、

昔の芙蓉を賦す者は多し。復た曹・王・潘・令（陸）の逸曲、孫・鮑・江・蕭の妙韻と雖も、權に麗美を陳し、粗く採掇を擧げざるは莫し。豈に所謂厥の艶態を究め、其の風謠を窮むるものかな。頃ろ、暇景に乘じて、衆製を歷觀す。伏翫して日を累ね、不滿有り。遂に賦を作りて曰く。登高に非ずして以て賦すべき者は、惟だ採蓮のみ。

王勃はここで曹植、王粲、潘岳、陸機、孫楚、鮑照、江淹、蕭（統、綱、繹）等の六朝の名だたる辭賦作家の芙蓉の賦に對して、未だその艶態を究めその風謠を窮めるものではないと評し、これら南朝美文學の極意をつくした辭賦にさえも飽きたらぬと不滿をもらしているのである。そしてここで、芙蓉を賦すという言語表現の遊びを徹底して樂しもうとしているのである。このように雕蟲の文藝は、言語表現の遊びであり政治的功用はないとする考え方は、文藝を政治的功用性という枠組から解放し、それ自體の中に價値を見いだす謂はば文藝至上の立場に近いも

のである。この點では王勃自身が魏の曹植を援用しているように、建安末期あたりから成立してくる文藝自立の六朝文學論の立場にたつと言えよう。それでは、このような點では六朝文學論に連なり、一方政治功用主義的に文學をとらえる點では漢代儒家の文論に通じていた王勃の文學思想は、文學思想史上ではどのような意味があったのだろうか。

漢代儒家の文學觀は、文學を政治への從屬物としてみた。例えば、楊雄、班固、蔡邕等は緣情體物の文藝にも政治的社會的功用性を考えた。しかし、六朝の文學論はそのような漢儒のとらえ方を否定し、緣情體物の雕蟲の文藝には政治的功用性はないとした。それは、一方では雕蟲の文藝が政治的功用性から自立したことを意味し、またそこに六朝文學論の歷史的意義もあった。しかし、六朝文學論が雕蟲の文藝には功用性はないとして漢代の儒家的文學觀を否定した際、それではその政治的功用性があるのは如何なる文學か、というより建設的な方向での問題提起はなされなかった。總じて、現實政治から遊離した六朝貴族には、そのような問題意識は存在しなかったと言える。しかし、六朝門閥貴族社會を打倒し地方豪族、中下級官僚層にも開かれた新しい王朝を創建していった唐代人は、強い政治意識のもとに、六朝文學論の歷史的成果を反古にすることなく、その問題提起にこたえていった。すなわちそれが、政治的功用があるのは雕蟲文藝ではなく、本來的な正しい文學だとした唐代の儒家的文學觀である。ここに至って始めて政治社會に役だつあるべき正しい文學と、それとは無緣な所でそれ自身の存在價値を有する緣情體物の文藝との意識的な區別が生じ、そのことによって漢儒と六朝の文學論が統一されたのである。

とするならば王勃の文學思想は、漢代儒家の文論と六朝文學論を止揚した新しい唐代儒家的な文學思想であった

と言えよう。彼が「班孟堅は兩京に雄筆を騁せ、以て天地の奥區を爲す。張平子は一代に宏才を奮い、以て帝王の神麗を爲す」（山亭興序）、また「司空令尹の博物、二陸三張の文雅」（春思賦）と後漢の班固、張衡、西晉の張協、陸機、潘岳等を高く評價し、彼の屈原以降を全否定した文學史觀を裏切るような發言[9]をなしていることも、このような意味において解釋さるべきであろう。

この新しい唐代儒家的文學觀は、前に述べたように楊炯、駱賓王にもそのまま言えることであった。およそ初唐の儒家的文學觀は、漢儒的文論と六朝文學論を統一ないし並存したものであった。例えば『毛詩正義』で「毛詩大序」の詩言志說を、六朝文學論の主情主義の立場から解釋した孔穎達（五七四―六四八）や、「楚望賦序」（『全唐文』卷二四二）で班固の『漢書藝文志』詩賦略の「登高能賦」說を、同じく主情主義の方向でとらえなおした李嶠（六四五―七一三）などがそうであった。楊炯、駱賓王、王勃らの唐代儒家的文學觀は、そういう初唐の時代狀況の中にあったと言えよう。

六　結び

六世紀の末まで中國は、六朝貴族社會の中において修辭主義的主情主義的文學理論を發展させてきたが、七世紀の初め、久しく三世紀もの間南北に分裂していた中國を統一した唐王朝になると、六朝時代とはうって變り、俄かに復古的儒家的文學思想が支配的となった。またそれは單なる漢代儒家的文論の燒きなおしではなく、六朝の文藝至上的な修辭主義的主情主義的文學理論の成立における文藝の自立と情性の解放の時代を通りすぎてきたものにふ

さわしい、新しい装いをもった唐代的な儒家的文學思想として現われたものであった。このことについては既に述べたとおりである。その漢儒の文論の復活の背景には、唐王朝創建當初の儒教イデオロギーによる思想統制という國家的要請があったことが考えられる。大宗自ら、

夫れ功成りて樂を設け、治定まりて禮を制す。禮樂の興は儒を以て本と爲す。風を弘め俗を導くは、文より尚(たつと)きは莫し。教を敷き人を訓すは、學より善きは莫し。海濱既に晏かとなり、波塵已に清まるに及び、七德の餘威を偃せ、九功の大化を敷く。此の際に當たりては、則ち甲冑を輕んじて詩書を重んず。

（『帝範』崇文篇）

と述べているように、隋末から唐初の内亂を一應收拾しえた唐王朝にとって次なる課題は、儒教イデオロギーによって人心を統一していくことだったのである。四傑の文學思想が様々なヴァリエイションを持ちつつも全體としては儒教の立場に據るのは、このような思想狀況の中にあったからに他ならない。

しかしながら彼らの文學思想をいくらかでも詳細に檢討するならば、そこには決してひとしなみには扱うことのできない異質性が存在していた。例えば文學史觀一つ取り上げてみても、屈原の楚辭文學以降を否定するもの、漢の辭賦文學以降を否定するもの、更に南北朝、隋もよいものはよいとして評價するもの、といったように様々であった。このように四傑の文學史觀がバラバラであるのは、六朝文學史への評價が固定する中唐に至るまでの過渡期にあったからであろう。六朝の盛衰興亡を眼のあたりにした唐初の人々は、かかる軟弱巧緻な文學ではいけないという反省をなしたが、初唐の四傑の時代には、未だ、何が良くて何が惡いのかという統一的評價が定まっていなか

ったのである。

從って文學史上ではともかく、少なくともこの文學思想史上において、輕視できぬ異質性を有していた王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王を、四傑として併稱することには殆ど意味があるとは言えぬであろう。もともと四傑という名稱自體が彼らの共通する文學傾向につけられたものであり、決して彼らの文學思想に對するものでなかったことを考えあわせるならば、それは當然のことかもしれない。むしろこのように併稱することは、あまりにも異なる彼らの違いを見落としてしまう危險性さえあると思われる。そして事實、彼らの異質性は現在に至るまで見落とされてきたのであった。（完）

一九七九年　五月

註

（1）漢代の儒家的文學思想が、北周から隋そして初唐へと、官吏登用問題に關する議論の中から現われて來たことについてはすでに拙論で論じた。「選擧論からみた隋唐國家形成期の文學思想」（『九州中國學會報』二二）を參照。

（2）一部に、楊炯が縣令となった盈川縣を四川省とするが、誤りである。『新唐書』地理志によれば、四川の黔州黔中郡洋水縣を盈川縣と呼んだのは先天元年（七一二）以降のことであり、楊炯の時代には四川には盈川縣は存在しなかった。一方、浙江の『衢州府志』（卷十三）には、先天元年に楊炯が縣令となって赴任したことを記錄している。

（3）「盧照鄰の傳記と文學」（『立命館文學』一九六號　一九六一年）參照。

（4）同じ發言が次のように「駙馬都尉喬君集序」にもある。

「痛なるや、王澤既に竭き、諸侯は麋鹿の場と爲り、帝圖伊れ梗がり、天下は豺狼の國と作る。秦人一たび舊章を滅し、大いに黔首を愚る。群書火に赴きて、崑岳の高煙と化し、儒士坑に投ぜられ、蓬萊の巨壑に變ず。樂、海に沈みて、河間王初めて古篇に睠睠たり。禮、諸夷に失はれて、叔孫通乃ち綿蕝に區區たり。安國、科斗を討論して、五典叶い從い、史遷、獲麟を

祖述して、八書を爰に創る。衣冠、禮樂は、重く三代の風を開き、玉帛・謳歌は、六經の業を墜とす無し。鬱たり其の興詠、大雅是に於いて群を爲す。」

（5）平岡武夫著『經書の傳統』第二章史官の意識と古典主義の文學――蕭穎士の上表――（一三一～一三三頁）参照。

（6）この點について増井經夫氏も、「唐のはじめごろまでは、文學的な仕事を雕蟲の小技」として「生涯かけて熱中すべき本格的事業」ではないと卑しむ風潮があった、と指摘している（『「智囊」中國人の智恵』五一頁）。

（7）王勃の生卒年にも數説あるが、小論では田宗堯の「王勃年譜」（『大陸雜志』三〇―三一）と劉汝霖の「王子安年譜」（『師大月刊』二）に據った。

（8）王勃が門閥貴族の出身とは言っても、唐代においてはもはや門閥貴族が時代を擔う階級ではなかったように、王勃の家系も數代のちには衰亡してしまったようである。（守屋美都雄著『六朝門閥の一研究』第二節文中子王通の家系）

（9）この他にも、これと同樣の發言を王勃の文集の中に數多く見い出すことができる。左はその一例にすぎない。「（友人の楊炯が）翰苑を開闢し文場を掃蕩し、宮商の正律を得、山川の傑氣を受くが若きに至りては、陸平原・曹子建と雖も以て車載し斗量すべきに足り、謝靈運・潘安仁も以て膝行し肘歩すべきに足る。」（山亭思友人序）

「是を以て子期の幽思は叔夜の形言を感じ、伯嗜の雄藻は林宗を待ちて愧無し。」（與契苾將軍書）